

## 平成 30 年度個別学力検査等（前期日程）

「地理歴史入試問題」 出題意図

### 1. 日本史問題

【出題の意図】

(Ⅰ)

日本古代には、都の場所が比較的頻繁に移動するという特色ある現象がみられた。こうした都の変遷について、7世紀半ばの乙巳の変（大化改新）にともなう難波遷都から、8世紀半ばの疫病流行などを背景とした恭仁京・難波京・紫香楽宮への遷都、平城京への遷都にいたるまでを対象にして、当時の政治・社会情勢と関連させながら、その前後の時代の状況と混乱することなく、正確かつ具体的に理解できているかどうかを問うた。

(Ⅱ)

臨済宗は鎌倉幕府や室町幕府に保護されて発展したが、特に室町時代になると、五山・十刹の制が整備され、臨済僧たちが多方面の分野において活躍した。政治的側面では、室町幕府の政治・外交顧問として重用されたこと、文化的側面では、優れた漢詩文の創作による五山文学の発展や、禅の精神を表現した水墨画の流行など、新しい文化の担い手になったことについて、正確かつ具体的に理解できているかどうかを問うた。

(Ⅲ)

寛永 20 年（1643）に江戸幕府が発した田畑永代売買禁止令は著名だが、その禁止令が発せられていたにもかかわらず、実際には江戸時代において農村における土地移動はやむことなく、農民の階層分化を生み出す事態となっていた。本設問は、このような矛盾の背後にある歴史的背景について、寛永 20 年（1643）という時期にこの禁止令に盛り込まれた内容や、その後の農村社会をとりまく社会的・経済的情勢の歴史的変化と関わらせて理解できているかを問うたものである。

(Ⅳ)

王政復古を旨として成立した明治新政府は、祭政一致を行うとともに、天皇崇拝を中心とする神道を国民全体に広めようとした。神道国教化の試みは、仏教界や国民の生活・意識に多大の影響を与えたが、結局挫折することになる。本設問は、政府の神道国教化のねらいや、神仏分離令や大教宣布の詔など、一連の関連政策の具体的内容、仏教界や国民の生活・意識などに対する影響を正確に理解しているかどうかを見るために出したものである。

## 2 世界史問題

### 【出題の意図】

#### (I) ※共通

出題の意図としては、インドに渡った玄奘の仏教的世界観を通じて、多様な風土から成るアジアの地理的な空間認識と、世界史で学習した歴史的な事象が、どれほど有機的に結びついているか、改めて認識してもらうことを狙いとした。

問 1 では、史料からアジアの風土が大まかに四つに区分されることを読み取り、併せて玄奘がインドへ旅立った 7 世紀初頭という時代に、それぞれの風土でどのような政治勢力が存在していたかを問うた。この時代は、各風土を通じて新たな政治的統合が進んでいた頃にあたり、そのような環境のなかで玄奘の旅行が実を結んだ側面がある。

問 2 の (1) では、唐は周辺諸国や諸民族とどのような関係を結んで帝國的な支配を及ぼしていたのか、またそれが 10 世紀の宋代になると、同様な関係を維持できた周辺国がある一方で、遼・金・西夏という西・北方の遊牧系諸国とは新たな外交関係を構築していたことが、どれほど正確に理解されているかを試した。とくに唐代では、冊封・朝貢・羈縻支配など、また宋代では和議・和約や絹・銀の貢納などのキーワードをうまく使用して論述できているかどうかポイントとなる。

問 2 の (2) では、北朝期から唐代にかけて形成された「中国」の諸制度が周辺地域に継受されるなか、日本にどのような制度が導入されたかを具体的に答えさせた。「世界史」の中には日本も含まれていることを改めて認識してもらいたい。

問 3 では、西アジアにおいて、現在にまで及ぶ、それまでと全く異なるかたちの国家や社会が生まれたことが、キーワードとして提示した三語を手がかりに正確に表現できるかどうか解答のポイントとなる。

問 4 では、「宝主」の地の周縁にあたるソグディアナから、北方の「馬主」・東方の「人主」の地に積極的に進出し、移住聚落を設置しながら交易活動を展開していたソグド人と結びつけることができるかどうかを試した。宗教面・文化面では、彼らが伝えたマニ教や、公用語・公用文字に採用された彼らの言語・文字が、遊牧国家である突厥あるいはウイグルで重視されていた。また政治面においては、彼らが遊牧国家のトップリーダーである可汗のブレインとして活躍したり、他国との外交でも使者として派遣されたりしていたことなどが解答として期待されている。

#### (II) ※共通

図像資料の解釈はそれを見る者によって多様でありうる。本問では、世界史で学んだ知識を活かして東西ユーラシアで描かれた孔子像に関して自分の解釈を示そうとした学生の話に耳を傾けながら、解答することが求められている。問 1 では、8 世紀頃の中国で描かれ

た孔子像がひろく東アジアに普及したとの話から、当時の中国を中心に東アジアで築かれた文化圏の姿への理解を、17世紀後半のフランスで描かれた孔子像が「帝国の学堂」として描かれたとの話から、「科学の時代」から「啓蒙の時代」へ至るヨーロッパ文化の変容と文化と国家の関係への理解を問うた。問2では、様々な民族を複合した清帝国のうち、漢人の住む地域で行われた統治が歴代の中華王朝を継承した側面と満洲人が支配者として君臨した側面の二重性をもっていた点への理解を問うた。それらの解答は、世界史で学んだ知識を会話文の内容に応じて柔軟に組み替えながら導き出されるものだが、8世紀の東アジア、17世紀のヨーロッパ、清朝について、紋切り型の説明に終始する解答が散見された。

### (Ⅲ) ※文学部

18世紀末以降、ヨーロッパの政治体制は絶対王政と身分制社会が崩れ始め、19世紀半ばには市民を中心とする運動が各地で起こり、次第に国民国家の基礎が作られていった。この時期に、欧米諸国で人口調査の方法が確立されていった。問1は、この二つの関係について考えてもらうことが狙いであった。国民国家の政治主体は国民であり、その基本となる選挙の実施や国民軍の設置などには正確な人口調査が必要であったことが書けているかがポイントとなる。

この正確な人口データは、東南アジアで植民地支配の道具となっていった。問2では、人口調査が税の徴収や民族ごとの分割統治に利用されたこと、一方で、そのデータは後の自民族意識の形成に寄与し、独立運動に影響を及ぼしたが、後の国内民族対立の種ともなったことなどが解答として求められる。問2の解答に、強制栽培制度による人口激減について書いているものがあつたが、この時期、ジャワの人口は増加しており、一方的に搾取されてやせ細る植民地社会というイメージは、すでにかなり古い。

### (Ⅲ) ※外国語学部

昨年に引き続き、外国語学部ではアドミッションポリシーに即しつつ文学部とは異なる問題を出題した。マーシャル・プランが戦後世界に及ぼした影響は大きいですが、それを評価する立場はさまざまである。本問は、資料の性格を理解したうえで、それに関連する適切な歴史的事実を読み取る力を試した。問1では、プラン実施後に西欧と東欧の諸国がそれぞれ経済や安全保障の面で協力していく過程を問うた。欧州の歴史展開をひと括りにするような記述も散見されたが、過半の解答において出題意図は理解されていた。問2では、「アフリカの年」に独立した国について問うたが、正答を出した受験生は少数に留まり、アフリカの歴史にまで学習が行き届いていないことが明らかになった。世界の幅広い地域に関心が向けられるような出題を工夫したい。

### 3. 地理問題

#### 【出題の意図】

#### (I)

世界の森林と農業について、気候帯別・地域別の様々なタイムスケールにおける森林の変遷や、20世紀以降の農業生産性の地域ごとの特徴について問う設問である。いずれも細かい知識を問うよりもデータを正確に読みとり、論理的に記述する力を試すことを主眼としている。「過去1万年の推移」「近年の推移」といった、タイムスケールの違いを正しく峻別し解答する力が必要とされるなど、教科書的知識の機械的暗記に頼るのみでは対処できない総合的な理解力を求めた。

#### 問1

冷帯・温帯・熱帯それぞれの、現存する森林面積と過去1万年の間に失われた森林面積を相対比で示した図1を読みとる力とともに、自然的・歴史的背景を推察する力を問うている。図1は単に気候帯ごとの現存と消失の比を示しているのではなく、気候帯間の現存・消失量の比較を示したものである。ここから、過去1万年の消失量が温帯で最大である自然的・歴史的な理由や、熱帯林の現存量が多い気候的な理由などを推察することができる。データを素直に読みとる読解力があれば正解に至ることは難しくないが、現状の森林分布や森林利用の記述に終始することなく、設問の意図を把握した解答が期待された。

#### 問2

問1に続いて森林面積の地域別推移に関する設問だが、問1と対照的に、近年の動向を貿易を介した地域間の関わりとともに問うている。過去1万年の変遷とは対照的に、近年の森林減少は主に南アメリカ、アフリカ、東南アジアの熱帯地域で起こっている。それに対して、中国で大規模な植林などが進行する東アジアでは森林面積は増加しているが、木材貿易を考慮すると熱帯の森林伐採が中国を含む温帯地域の森林需要に深く関連しているという背景を正しく推測することが求められている。個別の地域における動向の正しい記述のみならず、地域間の関係についても十分な考察が必要であった。

#### 問3

東南アジア、南アジア、アフリカの農業生産性のおよそ半世紀間の動向から、その背景を問う問題である。東南アジアと南アジアでとくに顕著な土地生産性の向上が見られることに関しては、「緑の革命」の功罪に関する記述を求めている。これらの地域に対してアフリカの生産性の伸びが緩やかなことに関しては、当該地域で緑の革命が進まなかった背景についての考察が求められるとともに、近年は改良品種の普及によって食糧生産性向上の兆しが見られることについての言及も必要となる。緑の革命に関しては正しく記述するこ

とが必要であるが、一方で東南アジア・南アジアとアフリカの差異についても十分な記述が求められていた。

## (II)

南アメリカの代表的な植生（植生帯）・気候区などと、そこで行われている経済活動とを連関的に位置づけて記述することを求めた。

### 問1

パンパ地帯は、半乾燥気候から湿潤気候のもとで広がっている。その植生の大部分はステップから温帯草原へと遷移した形態となっている。降水量の多寡によって湿潤パンパと乾燥パンパに大別され、主として前者では牧畜（牧牛など）、小麦・トウモロコシ・大豆などの企業的穀物農業、アルファルファなどの牧草栽培が見られ、後者は粗放的な放牧地帯（牧羊など）となっている。大土地所有制度の残存も見られる。本問はオーソドックスな設問であり、正確な記述が要求された。

### 問2

熱帯雨林気候区では主として粗放的な焼畑（キャッサバ生産）や農業（サトウキビやカカオ生産）・林業・牧畜などが行われている。セルバにおける林業および大豆畑・放牧地への転換を目的とする森林開発は、しばしば環境破壊とされてきた。サバナ気候区では企業的牧畜や大豆・コーヒーなどの栽培が見られる。（熱帯ではプランテーション農業が認められる）。温帯気候区では南部を中心に、小麦・果樹・肉牛生産などのための企業的経営や混合農業が行われている。ここでは、限られた字数の中で気候区ごとの代表的な作物・農林業形態などを記述することが求められた。

### 問3

南アメリカにおけるブラジルは、そもそも人口規模・経済規模ともに最大であり、内需のスケールが大きく、資本主義化の歴史も古かった。資本主義化初期においてはモノカルチャー経済が主体であったが、現代では、農林業の多角化が見られるほか、製鉄業を含む重工業、とくに航空機産業・自動車産業が盛んとなった。南米諸国連合の加盟国でメルコスール圏その他の南米諸国における需要を背景として経済成長を遂げてきた。1970年代以降の幾多の経済危機を乗り越え、BRICsの一員として経済成長を実現している。石油・バイオエタノールの開発により、エネルギー輸出国としての地位も見込まれている。本問では、時間軸と産業編成をうまく整理して記述する力量を問うた。